

新美南吉の青春と西洋音楽

——ベートーヴェン交響曲第六番《田園》聴取をめぐる——

加 藤 希 央

はじめに

童話作家、新美南吉（一九一三—一九四三）が西洋音楽を愛好していたことは、近年広く知られるようになった。二〇一三年、南吉生誕百年記念の年には「南吉が愛したクラシック音楽―詩の朗読と共に」¹⁾等、南吉の名を冠した演奏会が全国で開催された他、二〇一六年三月には南吉の命日である貝殻忌の催しとして、南吉の故郷半田市にある新美南吉記念館の主催により、様々な音楽イベントが開催されたⁱⁱ⁾。

南吉の日記には、彼が少年の頃から、文学と共に音楽にも関心を寄せていた様子が記されている。これが、現代において、南吉と音楽とを結びつけた催しが行なわれる要因と思われる。しかし、その日記記述からうかがわれる、南

吉の生涯における西洋音楽愛好の度合いは、決して熱烈なものではなかったようだ。南吉が生きた時代は、蓄音器やレコード、ラジオといった音楽メディアが一般にも普及し始めており、彼の友人のうちには個人でそれを所有する音楽好きもいた。しかし、南吉は女学校の教員となりそれなりの給料を得るようになってからも、自分で蓄音器を持つことはなかった。

とはいえ、南吉が音楽を好んだことは確かである。大正から昭和初期を生きた、ひとりの若者と音楽との繋がりを、南吉の日記は確かに伝えている。個人的な音楽聴取の記録は、対象となる人物の人となりや生き方、その人を取り巻く社会についての、貴重な情報を含んでいる。南吉の音楽体験を辿ることは、今も愛読される多くの物語を残した作家、新美南吉の実像に近づく道のひとつとなり、その作品

解釈にも何らかの影響を及ぼすのではないだろうか。

—

新美南吉（本名、新美正八）は大正二年、愛知県知多郡半田町（現在の半田市）岩滑に生まれた。幼少より文才を示し、旧制中学二年生の頃より盛んに童謡や童話を書き始めた。昭和六年に中学を卒業後、師範学校を受験するも体格検査で不合格となり、南吉は小学校の代用教員を勤めながら、児童雑誌への投稿を続けた。そして同年九月、北原白秋門下による童謡雑誌『チチノキ』に参加し、詩人で編集者の巽聖歌と知り合う。その年の十二月、南吉は巽を頼り上京し、北原白秋と面会する機を得た。これにより上京の意志を固めた南吉は、巽の薦める東京外国語学校（以下、東京外語）を受験し合格。昭和七年四月より、東京での学生生活をスタートさせた。

上京する前の南吉は、いわゆる西洋音楽とはほぼ無縁の環境に暮らしていた。小学校で唱歌を習い、中学校で友人とハーモニカを楽しみ、代用教員として学芸会で唱歌のピアノ伴奏に挑戦したこと。これが、故郷における南吉の近代的な音楽体験の、ほとんど全てであった。

南吉が本格的な西洋音楽を聞くようになったのは、東京外語の学生となってからのことである。南吉が旧制中学に

進学した大正十五年、小学校から中学校への進学率は全国平均で約二割である。中学からさらに上の学校への進学者は、地域におけるエリートと目された。西洋音楽は、そうした高等教育機関在学者の多くが挙げる趣味であったⁱⁱⁱ。

東京外語時代に書かれた南吉の日記には、彼の学生生活において最も重要であった文学についての記述と共に、西洋音楽に関する記述も散見される。南吉は、東京では蓄音器を備えた名曲喫茶と呼ばれる喫茶店に友人たちと足繁く通い、学校の長期休暇で帰郷した折には、蓄音器を持つ友人を訪ねてレコードを聞かせてもらっていた。南吉の日記に具体的な作曲家の名前が現われるのは、昭和八年一月七日、冬期休暇で帰省した折、中学時代の友人の家で聞いた「ベーターベン」である。この時は「ベーターベンに感激してかへつて、童謡を一つひねり出した^{iv}」南吉であったが、翌年度の夏期休暇で帰省した時の日記には、レコードを聞かせてもらっても集中できないと悩み、「私には大して音楽は面白くない^v」と、つい本音もこぼしている。それでも、南吉は友人と連れ立ちレコードコンサートに出かけ、学校が始まればまた東京の友人と共に名曲喫茶に通った。南吉の学生時代における西洋音楽聴取の場には、常に友の姿がある。昭和八年十二月に書かれた南吉の日記には、ベーターヴェンの交響曲第六番《田園》を四日間集中的に聞き、楽曲を理解しようと勤めた様子が記されている。この時の聴

取が、以後南吉が生涯にわたり西洋音楽を愛好していく契機になったと、筆者は考えている。南吉は、西洋音楽に對しどのように近づいていったのか。また、南吉にとり西洋音楽とはどのような存在であったのか。これらを南吉の日記を軸に読み解くことが、本稿の目的である。

二

本節では、昭和八年十二月十六日から二十二日までの南吉の日記^{vi}から、ベートーヴェンの交響曲第六番《田園》聴取に関する部分の抜粋を提示し、考察を試みる。

十二月十六日 土曜日

(前略) 又澄川のとこへ来て、一緒に田沢と云ふ音楽趣味の勝つたいやに骨董品をあつめた喫茶でベートーベンの田園交響樂をきいた。小便をしたくてたまらないのをこらへてゐた為、ゆつくりきく余裕がなかつたのがくやしい。(後略)

この日南吉は、友人の澄川と一緒に喫茶田沢で《田園》を聞いた。澄川稔は明治大学の学生で、南吉とは児童雑誌『赤い鳥』の投書仲間として知り合つた。澄川は大学卒業後、河出書房に入社し、南吉初の単行本『良寛物語』手毬

と鉢の子ⁱⁱ出版の契機をつくつた人物である。昭和十二年、南吉から澄川に宛て書かれた書簡にドビュッシーに関する記述が見られることから、二人が西洋音楽について語り合う仲であつたことがわかる。しかしこの日の南吉は、生理現象のため音楽に集中できなかつたとあるのが微笑ましい。

十二月十八日 月曜日

青木の借^{iv}してくれたアンドレ・ジツドの《田園交響樂》を讀んでしまつた。学校の休み時間に讀んでしまつた。讀み了つた後の瞑想―美しく焼かれた肉のうすい丸い壺。その壺をクラスメートの奴に話しかけられる為にあちこはされるやうな気がした。アンドレ・ジツドはもつと理解しが^vい深遠なものだと恐れてゐたが、割合にやさしく解ることが出来たのがうれしかつた。

藤掛が土曜以來休んでゐるので、辻と村松と二人で見舞つてやつた。別に病氣してるわけではなかつた。ナナと云ふ喫茶にレコードがあると言ふのでおごらせた。ベートーベンの田園交響樂をかけて貰つたが悲しく理解出来なかつた。(後略)

ベートーヴェンの音楽を理解するために、南吉は楽曲と同名のタイトルを持つ文学作品に手がかりを求めたと思わ

れる。はたして、ジツドの『田園交響樂』は「割合やさしく解ることが出来た」と喜んだ南吉であったが、読み終わったその日の内に聞いたベートーヴェンの《田園》は、二度目の聴取であるにも関わらず「悲しく理解出来なかつた」。西洋音楽をいかに理解すべきか、南吉は模索しているようである。一緒に聞いているのは、東京外语の友人たちである。

十二月二十一日 木曜日

国語の試験である。(中略)それから澄川にあつた。トレビアンと云ふ所で田園交響樂をきいた。四枚目をきいた頃、一群の愉快なつとめ人達が来て、スカートの下が見たいとか、スカートはどんなにしてぬぐのかなどと云ひ出したので、五枚目をきかずに田沢へうつつて、そこで始めからききなほした。娘がゐた。均整のとれた姿態と、魅力はないがぬけ穴のない顔、白い手。この娘が舞踏をする千代なんだなと思つた。中頃に若い外人(多分英人)がやつて来た。こん意にしてゐるらしく、娘と二人でむつまじく話してゐた。一方は英語で一方は日本語で。その英人の唇がテーパーの上の赤いけしの花と類似してゐると思つてきいてゐた。(後略)

この日、南吉は喫茶店を二軒はしごして《田園》を聞き込むことになつた。連続聴取初日に一緒だつた澄川と、まづ喫茶トレビアンで聞き始めた。SPレコードでは、交響曲《田園》は全楽章が五枚で一組である。南吉はその四枚目まで聞いた所で喫茶田沢に移動し、そこでまた一枚目から聞いたとあるので、ほとんど二回、続けてこの曲を聞いたことになる。しかし移動した後の店での記述にも、音楽に関する言及はない。だがここでの描写に、南吉の聴感の冴えが現われているように筆者には思われる。南吉は集中しているのである。これについては、第四節で述べることにする。

十二月二十二日 金曜日

修身の試験。試験が終つてから藤掛にマイネクライネををまをらせてここでも又田園交響樂。きくたびに解つて来るやうな気がする。まるで模糊としたニユアンスのみとめられない一枚の無感覚な板であつたのが、段々と霧を払ひ、ピントをあはせて明瞭に浮びあがつて来るのだつた。帰りの電車の中だつたか、或は道を歩いてゐた時だつたか、とも角今日一日のうちの或時に芸術を解するのには或程度まで智識を要求すると思つた。(後略)

この日は十八日に一緒だった藤掛と共に喫茶マイネクライネにて「ここでも又田園交響楽」。そして、「きくたびに解つて来るやうな気がする」。四日間意識的に聴取を繰返したことで楽曲に慣れ、落着いて聞き通すことができるようになったのだらう。見たり触れたりすることのできない音楽は、何かしら実感を伴うような手がかりを得られないと、非音楽専門家の場合は特に、なかなか安心して聞けるようにならないものである。繰返しての聴取は、その一番の近道である。何度か聞けば、楽曲の展開を予測出来るようになり、音楽の流れを自然に感じられるようになる。「まるで模倣としたニュアンスのみとめられない一枚の無感覚な板であつたのが、段々と霧を払ひ、ピントをあはせて明瞭に浮かびあがつて来る」との比喩には、南吉が西洋音楽に馴染んでいく過程における実感が表現されており興味深い。さらに、この日の記述の終りにある「芸術を解するのには或程度まで智識を要求すると思つた」の言葉に注目したい。ここには「教養主義」の思想が現われている。そしてこの思想こそ、南吉がベートーヴェンを聞き理解したいと願う動機を支えるものであつた。

三

「教養主義」とは、読書などを通じ智識を得ることによ

り、人格の完成を望み社会の改善を求める思想である。大正時代から昭和初期にかけての、主に旧制高等学校や大学といった高等教育機関に在籍する学生たちの多くが、この思想を規範としていた。ドイツの教養(ビルドゥング)概念の影響の下、学生たちは人類の文化、ことに西洋の哲学、芸術、科学などを継承することを通して、人格者となることを目指したのである。しかし教養主義には、その理想とは異なる側面もあつた。それは擬似的な階級意識である。高等教育機関に在籍する学生たちは、「教養」を持つ自分たちと、進学を諦めざるを得なかつた多くの若者たちとを区別し、自らはより高級で文化的な世界に属する人間であると考えようになつた。そのような「教養」とは、若者たちに強い憧憬を抱かせる存在でもあつた。^{vii}

日本におけるベートーヴェン受容には、この教養主義が少なからぬ影響を及ぼしていた。明治以降、国家主導で積極的に取り入れられた西洋音楽であるが、実際の演奏に立ち会う機会は非常に限られていたため、楽曲にまつわる逸話や作曲家の評伝など文字による情報の方が、音楽よりも先に、人々に広まることとなつた。^{viii} 日本で最初に紹介されたベートーヴェンの評伝は、ロマン・ロラン『ペエトオフエン並にミレエ』(加藤一夫訳、大正四年)である。その後も同著者による『ベートーヴェン』、『ジャン・クリストフ』が刊行され、ロマン・ロランが描くベートーヴェン

像―自らの出自や宿命に苦悩し、自己陶冶を通して至高なる世界を形成する人間像とその音楽解釈―に、日本の知識人は大いに魅了された。ベートーヴェンは、西洋音楽の理想を体現する作曲家として認知され、そのイメージが定着していった。

当時の学生たちにとり、ベートーヴェンについて語ることは、まさに自らの教養を示すことに繋がった。南吉が学生時代を過ごした昭和零年代、実際の演奏に接することはまだ容易ではなかったが、蓄音器やレコードといった音楽メディアはかなり普及し始めていた。学生の身であれば、レコードを聞く機会はそれなりに得られたであろうことは、南吉の日記からも明らかである。南吉がベートーヴェンを聞く動機には、楽曲の魅力よりも先に、「ベートーヴェンを聞き理解する教養を持つ自分」たらんとする、教養主義に裏打ちされた自意識の顕示があったといえよう。昭和八年十二月の日記に記録された、南吉のベートーヴェン交響曲《田園》連続聴取が、必ず友人同伴で行なわれていることも、そのことを示している。教養の修得は、自他とも認められるものでなければならないのである。

少し先のことになるが、南吉が安城高等女学校に職を得た翌年、昭和十四年一月七日に書かれた南吉の日記には、当時の「高等教育を受けた若者と西洋音楽」の持つ雰囲気がよく示されている。半田商工会議所を会場に、南吉

の中学時代の同級生や後輩たちにより、レコードコンサートが催された時の記述である。南吉の西洋音楽受容に最も影響を与えた友人、畑中俊平を中心に開催されたそのコンサートの様子を、仲間たちの微笑ましいほどに誇らしげな姿を通し、南吉はややしニカルに記している。この頃、南吉は高等女学校の教員として、社会的にも経済的にも安定した生活を手に入れていた。「この二三十名の人々の中で社会的に一ばん偉いのは僕さといふ意識を心の底に持ちながら」聞いていたという記述からは、教養主義的エリート意識は身の内に残りつつも、その嫌みを自嘲できるようになった南吉の成熟と余裕が感じられる。

こうして、まずは教養としてベートーヴェンの音楽を理解しようと努めた南吉は、十二月二十二日の日記に、《田園》という音楽作品に対する自身の会得について感想を記している。しかし、この時南吉に《田園》を「解つて来るやうな気がする」と感じさせたものは、教養や知識といった理性的な存在ではなく、音響として体感に作用する存在であったと筆者は考える。それを、前日十二月二十一日の日記にみられる描写に、読み取ることができるように思われるのである。

四

交響曲《田園》の標題は、ベートーヴェン自身が付したものである。作品はこの時代の交響曲としては異例の五楽章で構成され、第一楽章「田舎に到着した時の愉快な感情の目覚め」、第二楽章「小川のほとりの情景」、第三楽章「田舎の人々の楽しい集い」、第四楽章「雷雨、嵐」、第五楽章「牧歌 嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」と、全ての楽章に標題がつけられている。しかし南吉は、この標題については知らなかったと思われる。もし知っていれば、おそらく何らか日記に記したであろう。

南吉は、自分にとってより近い存在である文学を、音楽理解のための手がかりとすることを試みた。これは、後に作家の道へ進む南吉としては自然な流れであるが、日本における西洋音楽受容そのものが、文字情報から進められたことは前述のとおりである。南吉がベートーヴェン交響曲《田園》理解の手がかりとしたのは、アンドレ・ジツドの小説『田園交響楽』であった。南吉は十二月十八日に、同名のタイトルを持つ文学作品と音楽作品とを、一日のうちに鑑賞している。しかし、その理解には差があった。

南吉の日記から、『田園交響楽』は南吉が初めて読んだジツド作品であったと思われる。読後の印象を「美しく焼かれた肉のうすい丸い壺」と表し、南吉が受けた感銘を伝

えている。しかし小説は、ベートーヴェンの交響曲《田園》に表現されたロマン派的な自然賛美の精気とは、趣の異なるものである。南吉は日記に、ジツドの『田園交響楽』は理解できたが、ベートーヴェンの《田園》は「悲しく理解出来なかつた」と正直に書いた。むしろ、異なる領域で表現された芸術が、そう単純に結びつくとは南吉も思っていなかつたであろうが、何らかのきっかけはつかめるかもしれないと考えたからこそ、その日のうちに《田園》を聞いたのではないだろうか。

しかしこの日、文学と安易に結びついた音楽理解を得なかつたことで、この楽曲が、南吉に西洋音楽聴取の感覚を得得させることになつたと、筆者は考える。それは、言語イメージに頼らず、音響と音楽の抑揚から南吉が感受したものである。

南吉は『田園交響楽』読了から三日後の十二月二十一日、喫茶トレビアンで三回目となる《田園》を聞き始めた。しかし曲の半分以上を聞き進んだところで、来店した「愉快なつとめ人」たちの会話を削がれてしまった。そこですぐに喫茶田沢へ移動し、曲の冒頭からもう一度聞き直した。先ほど聞いたばかりの音楽が、まだ脳裏に残っている状態での再聴取が、南吉に音楽への集中を促したと考えられる。そして日記に書かれた、店にいた娘や途中入ってきた外国人についての描写に、南吉の感覚がこの時、鋭敏に

なっていたことが読み取れるように思われる。筆者の主観が勝った見方ではあるが、論じてみたい。

南吉は喫茶田沢で《田園》を聞き始めてから、店内にいた娘に目をとめ、その均整のとれた身体つきや「白い」手から、彼女が話に聞いていた舞踏をするという娘であろうと推察する。やがて来店した外国人が、娘と会話を始める。南吉は二人を見ている。そして外国人の唇が、テーブルの上の「赤い」けしの花と似ていると思いつながら音楽を聞いた。この「白」と「赤」という、色の記述に筆者は注目する。少なくともここまでの《田園》聴取において、音楽を聞いている時間に南吉がとらえた視覚情報のなか、色彩が記述されたことはない。これは、この時南吉の視覚が冴えていたことを示しているのではないだろうか。そしてこの視覚の冴えは、音楽（音響）への集中―聴覚の冴えによりもたらされたものではないだろうか。

生活の中、音に対し常にはない意識を持った時、ふいに視界がそれまでと異なつたように感じられることは、ままあることである。十二月二十一日の日記に南吉が記した「色」は、南吉がこの時、これまでの聴取では経験できなかった音響、音そのものへの集中に成功していることの表れではないだろうか。音響への集中は、音楽に近づく端緒となる。《田園》連続聴取三日目にして得た音に対する集中の感覚は、南吉にこの楽曲だけでなく、以後女学校教員時代まで

引き継がれる彼自身にとつての西洋音楽の聞き方を体得させた。しかしこの時、南吉に意識されたのは「視覚」の冴えの方であり、それが聞いている音楽から受けた聴覚刺激と連動したものであることに、南吉は気づいていない。この日の日記に音楽についての記述がみられないのは、そのためである。^{ix}

南吉の文学について筆者は語る術を持たないが、一読者の感想として、南吉の描く色彩が印象に残ることがあった。ベートーヴェンの《田園》連続聴取と同じ月に書かれた「手袋を買いに」における、雪の粉に映る小さな虹や、「月が出たので、狐の毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトの影がたまりました」の部分には、初めて読んだ子供の頃にも、何かうっとりとするような気持ちになったことを覚えていいる。ここに、音は感じられないだろうか。昭和八年十二月二十一日の日記に、書かれていない「音楽」を重ねてみると、若い南吉の感受性が浮かび上がってくるように思われる。南吉の作品における情景描写の細やかな筆致は、視覚だけでなく聴覚も鋭敏に働いてこそその描出であるように思われるのである。

《田園》連続聴取の最終日である十二月二十二日、南吉はこの曲に対しやっと「きくたびに解つて来るやうな気がする」と、肯定的な反応をみせる。一曲を集中的に聞き込んだことで、曲の展開はかなり頭に入ったはずである。ゆ

えに、音楽の進むスピードに合わせて、推進する拍、リズムに乗り、音楽の持つ高揚と沈静、緊張と緩和を自然に感じることが出来る。この感覚がつかめると、音楽はぐっと聞きやすくなる。南吉はベートーヴェン交響曲第六番《田園》の連続聴取により、西洋音楽をこれまでよりずっと近しい存在として感じられるようになったはずである。

五

最後に、南吉が意識的に聞いたベートーヴェンの交響曲がなぜ第六番《田園》であり、より有名な第五番《運命》や、第九番《合唱》ではなかったのかを考察したい。ここには、南吉の音楽的嗜好が現われている。

南吉の日記において、ベートーヴェンは最初に登場した作曲家であり、最も多く名を記された作曲家である。このことは、ベートーヴェンが当時いかに知名度の高い作曲家であったかを示している。しかし、西洋音楽の入口に神のように聳え立つベートーヴェンの音楽は、南吉が本来持つ音楽的嗜好とは、実はそぐわぬものであったと筆者は考える。

昭和八年八月八日、夏期休暇で帰省した南吉は、友人の畑中に誘われてレコードコンサートに出かけた。その時書かれた日記に、以下のような記述がみられる。

(前略) ブラームスの何かをきいた。常に思索にふける夢想家ださうであるが、実に面の柔かいおとなしい、気持ちよい美しい曲である。かう云ふしづかなものが私には魅力があるやうだ。(後略)

ここに、南吉の素直な音楽趣味が書きとめられていることは、次に挙げる日記からも明らかであるように思われる。昭和八年十二月、南吉が東京の友人と連れ立ち連続して《田園》を聞いた一週間間に、南吉ひとり喫茶店に行った二日間があった。

十二月十七日 日曜日

(前略) プドルドッグへ一人で行った。小母さんが年下の自分に対して与へてくれる柔かい好意がプドルドッグを家庭のやうななつかしいものにしてくれた。シャンソン・イタリエンヌとトルナ・ア・ソレントの二枚のレコードを面白く何度もきいた。

南吉は、店主の女性に母性を感じているようだ。聞いたレコードも、難解さを伴ういわゆる芸術音楽ではなく、軽音楽に近い歌曲である。

十二月十九日 火曜日

(前略) 帰りにブドルに寄った。期待した程よく待遇されなかつた。そこを自分が出た時はお客は誰もゐなかつた。ふと帽子を忘れたのでとり返しにやつて行く、一人きりの小母さんがドリゴのセレナーデかけたところだつた。ちよつと小母さんの職業意識をぬいだ純な生活を覗いたやうな気がしてうれしかつた。

「ドリゴのセレナーデ」も、ロマンティックな旋律で当時人気であつた曲である。南吉が真に好んだ音楽とは、ベートーヴェンに代表されるやうな西洋芸術音楽ではなく、もつと軽く穏やかな楽曲なのである。

ベートーヴェンの交響曲《田園》は、より有名であつた《運命》や《合唱》と比べ、明るく朗らかな曲調を持つ。曲の始まりも、《運命》の衝撃や《合唱》の緊迫とは異なり、涼やかな雰囲気である。南吉にとり《田園》は、ベートーヴェンの他の交響曲と比べ親しみやすかつたであらう。そしてアンドレ・ジイドの同名の小説を知つたことも、南吉がこの曲を繰返し聞く意欲に繋がつた。交響曲第六番《田園》は、南吉の感性に馴染みややすい要素を複数持つ楽曲だつたといえよう。

まとめに

憧れの東京での学生生活も二年目を迎えた昭和八年は、南吉にとりまさに青春の年であつた。そして西洋音楽は、青春時代の幕開けと同時に、南吉の世界へ入ってきた存在であつた。はじめは難解と感じた西洋音楽であつたが、それを理解すべく南吉は若者らしい努力をみせる。やがて、自らの感性に調和したベートーヴェンの交響曲《田園》を手がかりに、南吉は西洋音楽の聞き方をつかんだのである。以後、女学校教員時代に至るまで、南吉は西洋音楽を愛好し続けていく。南吉にとり西洋音楽とは、昭和十四年、故郷の友人たちと集つたレコードコンサートの日記記述に見られるとおり、常に青春のイメージをまとうものであつた。その契機となつたのが、このベートーヴェン交響曲第六番《田園》連続聴取の経験だつたのである。

〔注〕

- i 二〇一三年八月四日 雁宿ホール(平田市福祉文化会館)大ホール。出演…名古屋フィルハーモニー交響楽団、他。
- ii 二〇一六年三月二十日「南吉の文学が奏でる音楽そして歌たち」雁宿ホール講堂。出演…でんでんむしアンサンブル(東京二期会会員による故郷の歌研究グループ)、他。

三月二十一日「作曲家・大中恩さんの指揮で《貝殻》を歌おう」

- アイブラザ半田。出演・大中恩、他。協力・半田市合唱協会。
- 三月二十二日「蓄音器コンサート」新美南吉記念館。
- iii 加藤善子 (1986) 「昭和初期の学生と音楽趣味」『大阪大学教育学年報』創刊号、一一七頁、大阪大学人間科学部教育学研究室。
- iv 渡辺正男編 (1985) 『新美南吉・青春日記―1933年東京外語時代―』明治書院、六頁。
- v 渡辺 (1986) 前掲書、一四四頁。
- vi 渡辺 (1986) 前掲書。なお、昭和八年に書かれた南吉の日記は、『校訂新美南吉全集』(1980-1983) 全十二巻、別巻二冊、大日本図書に収録されていない。
- vii 教養主義に関する参考文献は以下。竹内洋 (2003) 『教養主義の没落―変わりゆくエリート学生文化』中公新書。北村三子 (1999) 「近代青年と教養―教養主義を超えて」『教育学研究』六十六 (三)、日本教育学会。
- viii 西原稔 (2000) 「わが国のベートーヴェン受容の歴史」『ベートーヴェン全集』第十巻、一〇九頁、講談社。
- ix 南吉の聴覚感については、管見の限りこれまで集中的には語られてはいないようである。しかし南吉の日記には昭和十四年四月十六日、十七日(聴覚情報のみで記述された箇所がある)、昭和十五年一月十日(店内で流れていたラジオの音楽についての記述)、昭和十七年五月二十五日(屋外から届くラジオの音楽)等、南吉の聴覚の鋭さを窺わせる箇所が散見される。今後の研究課題としたい。

(かとう きお)